
ヘルシング×トライガン時々型月

ACEDO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘルシング×トライガン時々型月

【Nコード】

N4060T

【作者名】

ACEDO

【あらすじ】

トライガンで活躍したあのテロ牧師がヘルシングの世界に入り。暴れまくるお話です。

初めての投稿で色々分かりにくい点、疑問点があると思います。それらはまたコメントに書いて下さい。

不定期になると思います。宜しく願います。

プロローグ（前書き）

やっと投稿できました。

トライガンのテロ牧師が好きな自分はどこかで彼を暴れさせたいな
と思い微妙な漫画とクロスさせ衝動的に書いた小説です。文の使い
方など少し変かもしれませんが、大目に見てください。

プロローグ

プロローグ

血と硝煙にまみれた砂の惑星にその牧師はいた。自分と血の繋がらない家族を守る為だけに命を張った牧師がいた。しかしその牧師、ニコラス・D・ウルフウッドの命も家族を救うために使いきってしまった。

そして今彼は残り少ない時間を自分の背中を預けてきた友との酒飲みに当てていた。

場所は教会。孤児として生きていた自分を温かく向かい入れた家とも呼べる守るべき場所。そして守る為に血に汚れ、無理な人体改造により家族ですらわからなくなった自分が二度と戻れない場所。そこに家族を逃がし二人はベンチで静かに酒を飲んでいた。

「笑え、トンガリ」

牧師は隣にいる深紅のガンマンに話しかける。友の名をヴァッシュ・ザ・スタンピード。人間台風と呼ばれ、人外で百数十年この星の人類を守るためたった一人の兄弟を追う存在。この男に言わなければならぬことがある。

「お前は笑つとる方がええ。」そうや、今みたいな悲しそうな顔するんやない。笑え。お前にはまだやらなあかん事が残つとるやろがだから言つたる。殺す覚悟の自分と殺さない覚悟のお人好し、真逆の覚悟を持つてるくせに何かを守るといふ同じ目的を持つおどれにしゃくやから言いつうなかつたけど今言わせてもらう。

「カラッポなんていうて、悪かった。」初めて会ったあの時、このトンガリの笑顔がやけに虚ろに感じた。何かを守れなかつた自分の悲しさを隠すための仮面と思っていたが違う。旅をしながら気付いた。この笑顔はまだ守る者を守れている安堵なのだと。

「あのな、ウルフウッド。」なんやトンガリ。そんな押し殺した声

だして、こつちはもうポロポロや。よう聞こえん。

「無茶なこといなよ。」無茶か。けどなトンガリお前はまだ進まなあかん。別に1人やない。その壁に座ってる命懸けでワイが救った弟をつけたる。ワイはここでリタイアやけど、『泣き虫リヴィオ』がある。ワイほどやないけど腕は立つから安心せえ。

まあ心残りはあるけど一安心や。色々大変やるうけどあとまかせたで。

結局、ばあちゃん以外誰もワイとは分からんかったな。まあしゃあないワイは人殺しの化物フリークスや。誰にも歓迎されへん。

ヒラッ

ん、なんや？なんか空から落ちてくるな。上吹雪か？一体誰や？こんなアホなことする奴は。

……なんや。ワイの家族が乗ってる飛行船からやないか。空耳か？みんなの声が聞こえるわ。なんや「おかえり」やて？なんやワイはこの家に帰ってきてよかってんな……くそっこんなことならはよ帰っておけばよかった。ほんまにアホやなワイは。

そして牧師は叫んだ。己の愚かさに対する怒りなのか、帰ってこれた喜びかは分からないが叫んだ。残る命全てを使って叫んだ。

そして叫び終えた後ウルフウッドは力尽きた。心に不思議な満足感を残して。

……遠くで雷鳴が聞こえる……

プロローグ（後書き）

というわけでプロローグを書き終えたわけですが、自分で読んでみると、原作読まなきゃ分からないかもという所があります。すいません。今の自分にはこれが限界です。多分次回からはまだまし（？）になるはずです。ではまた次回。なるべく早く書くつもりです。

1 コンタクト 前(前書き)

どうも、やっと投稿することが出来ました。
なるべく週一で投稿します。

1 コンタクト 前

イギリス ロンドン ヘルシング本部

サイド ???

「どうだ？こいつの容態は？」

私は目の前で寝ている男を見ながら父の代から仕えいる執事に聞く。「命に別状はございません。お嬢様。まだ寝込んでいるのは極度の疲労によるものでございましょう。」

私は執事の言葉に一安心しながら疑問を投げ掛けた。「しかし、この男には大小多数の傷があったがそれはどうなのだ？」

そうこの男を発見した時は驚いた。突如として屋敷の敷地に轟音が鳴り、そこに駆けつけると、今にも死にそうな傷を負い、倒れている男がいた。幸い屋敷で処置出来たものの、時間が経つ程男の正体に疑問が出てきた。

「いえ、心配無用でございます。傷は人間離れた速度でふさがっております。お陰で違う心配が出てきましたが……」

そうなのだ。明らかにおかしい。人間離れた速度の自己修復。これの意味するのはこの男の立場だ。

「我等の天敵か？」

確認するように執事に問う。

「否、『奴ら』はよほどのことがないかぎり銃を使いません。また『彼』が起きていないことから否定できます。」

確かにこの男が『奴ら』なら私の僕が反応する。

「さらに言わせてもらえば『奴ら』の同類ならばこのような十字架を持つことありえないでしょう。」そう言いながら執事は壁に立て掛けてある布に巻かれた巨大な十字架を見る。

処置を施した時に、一応男の所持品をチェックした。すると出てき

たのは、拳銃2丁、予備のマガジン3つ、ホルスターと共に薬のよ
うな中身がある試験管3本、そして何より目についたのは男が背負
っていた巨大な十字架だった。

私も十字架を見やり自分を納得させつつもう1つの可能性を出す。

「ではバチカンだ。あそこなら巨大な十字架も異常な自己修復も説
明がつく。」そう、噂程度だがバチカンが再生者^{リジエネレーター}を成功させたと言
っている。

「それこそ否、我等とバチカンは条約を結んでおります。ボーダー
ラインぎりぎりならばとにかく明確に我等の土地でございます。そ
こまで大胆な行動は今のところ起こさない筈ですし、それに…」

「『それに…』 なんだ早く答える。」

珍しい。この執事が言い淀むことはほとんどない。

「…それが彼の持っていた薬の中身を検査した所、この薬は我々人
類が作ることが不可能な代物でございました。」

「つまり、この男はありえない物を持っている正体不明の人物。と
？」

「そのようで。」

つまりはこの謎の男の正体を突き止め、なにかしらの行動を起こさ
なければならぬ。私は頭を整理し執事に命じた。

「よし、ではこいつの意識が戻りしだい尋問を行う。護衛はおま
その必要はいらん。恩を仇で返す真似はせえへん」

さっきまで瀕死だった男が私に話し掛けてきた。

サイド アウト

1 コンタクト 前（後書き）

すいません。この回でウルフウッドサイドも書くことと思ったのですが、できませんでした。

これは、自分の力量不足です。

アドバイスなどをください。書き方を変えて行くことと思うので、では次回。

2 コンタクト 後（前書き）

すみません！

前、週一とか書きましたが、予備校が忙しく。またどのように書いていけばいいのかを手探りで考えている状況で。かなり時間がかかりました。

それに新しいクロスネタが出て来て……はい。すみません。とりあえずこのネタ一つでどこまでいけるかやってみます。

まあ、駄文です。よろしくお願いします。

2 コンタクト 後

サイド ウルフウッド

(…ん、なんや話しが聞こえるわ。)

ワイは意識が徐々に回復していくのを自覚しつつ、現状の確認を
行い始めた。

(今まで、ワイは寝ていた。それもごっつええベッドで。)

話し声が聞こえる。

「つまり、この男はありえない物を持っている正体不明の人物。と
？」

「そのようぞで。」

……黙って聞いていたら色々言われるな。声を聞く限り若い女と老
人が会話している。

(ワイをここに寝かしたのはこいつらか。)

こいつらが自分にとって敵になるか味方になるか、まずその事をは
つきりとしなければならぬ。

(まあ、問題はどんな風に話し掛けたらええかやな。なるべくリス
クを少なくせなあかん。)

条件は第一印象で好感とまではいかななくても自分が敵ではないことを示さなければならぬ。

「よし、ではこいつの意識が戻りしだい尋問を行う。護衛はおま」その必要はいらぬ。恩を仇で返す真似はせえへん。」

ワイはなるべく警戒させないように話に割り込んだ。

恐らくこのまま時間がたつにつれて向こうの人数が増えていく。助けてもらって悪いが相手の立場が分からない以上、少しでも自分の有利な状況に持っていききたい。

目の前の女はワイが起きたのを驚いた表情で見っていたが、すぐに引き締め、問いかけてきた。

「貴様は何者だ。」

「ワイはニコラス・D・ウルフウッド。巡回牧師をやってる。とこるでどこ何処や？」

「貴様は、聞かれたことだけ答える。次だ。随分物騒なものを持っているが此処に来た目的はなんだ？牧師なら教会に行くべきではないのか？」

主導権は握らせへん腹か。しかし、実際その対応は正しい。力任せに聞き出す方法もあるが、嬢ちゃんの後ろに控えてるじいさんが隙のない目で此方を見ている。こっちの所持品は全部押収されてるやろつから、力付くも却下か……。

（せやけどなんでワイはこんなところにおるんや？ワイはトンガリと一緒に……）

ズキッ

なんや思い出そうとすると頭が痛う いたう なる。けどこんな状況や泣き言はいつとられへん。

思い出せ。ワイが意識失う前になにが起こったんかを。それと同時に一気に記憶が蘇ってきた。教会の家族のこと、大切な弟を助けたこと、そしてワイが死んだこと……

(せや、ワイはあの時に死んだ。せやけど此処は地獄ってわけでもない。)

「なあ嬢ちゃん。此処はど「いいから質問に」此処は何処や聞いとんねん！すまん。多分やけどこれ答えてくれたらワイの正体を言つたる。」

「フン！此処はイギリスのロンドンだ。：何故そんな当たり前の事を：まあいい。さあ私は答えたぞ牧師！私の質問に答える！」

なんやて？イギリス？ロンドン？聞いたことはあるけど、なら此処はノーズマンランドやなく地球 ホーム か？なんや神様の申し召しか？けど考えてる暇あらへん。そろそろ嬢ちゃんがキレそうやからな。説明せなあかんか。

(まあええ一度死んだ身や死ぬ気でやればなんとかなるやろ。)

そしてワイはワイ自身について説明していった。

サイド アウト

2 コンタクト 後（後書き）

感想、誤字、脱字はコメントに。

化け物との邂逅（前書き）

どうも、今回は少し無理矢理に話を進めました。でないと、中々原作に入らない。

感想などは受け付けます。どうぞよろしく。

化け物との邂逅

そしてウルフウッドは語りはじめた。自分がいた砂の星のこと、自分の生い立ちのこと、家族を守る為に汚い仕事を沢山したこと、…そして最後に自分が救われ死んだこと。そして気が付いたら此処にいたことすべて話した。

しかし、話したのだがウルフウッドの目の前にいる女は信じていないようだった。彼女は持てる限り理性で怒りを抑えて喋り始めた。「貴様の言っていることが本当だとして、これからどいするつもりだ？」

「なんや、信じてへんのか。まあ、ワイも信じられへんけど…。」
「ならば、私の組織で働くのはどうだ？貴様の言っていることが本当ならば、実力もあることだろう。」

「ちょっと待てや。組織って。ワイは人殺しはあんまりしとくないんやけどな。」

「我々が戦うのは人ではない。化け物だ。「は？何を。」我が国と^{プロテスタン}国教を守るため、吸血鬼、人狼などの人外を倒す為の機関『王立国教騎士団』通称『ヘルシング機関』それが我々の組織の名だ。」

ウルフウッドは混乱していた。自分の寝床を確保出来るのは確かにありがたい。しかし、人外だ。人外と言ったら。あの不死身のガンマン、ヴァッシュしか思いつかない。そして自分がそんな化け物を倒せる自信がなかった。

「無理や。化け物の倒し方なんか分かるはずないやる。」

「それについては安心しろ。大体は特殊な弾丸を心臓か脳天に打ち込んでやればジエンドだ。」

「なあ、それは化け物とか言われる人間とかやないやるな。」

「中々信じないようだな。「当たり前やる！吸血鬼なんか信じられるわけない。おるんやったら証明してみい！」ふっ、そうか。証明したら信じるか。ウォルター！アーカードを呼んでこい！」

「承りました。」

そして、執事は誰かを呼んでいった。

「今の内に自己紹介でもしておこう。私はこの機関の長であり、ヘルシング家の当主、インテグラ・ファルブルケ・ウインゲーツ・ヘルシングだ。インテグラと呼べ。貴様の、いやウルフウツドの自己紹介は聞いたからもういい。あと一つ警告だ。驚くなよ？」

何に驚くのが分からなかったが、近づいてくる殺気のでかさに体が強ばった。その殺気は以前に体験したことがあった。

それは大切な人達を死なせてしまった時のヴァッシュが血の涙を流して出していた殺気と同じくらいの物だった。

そして、殺気が自分の前に来たとき、ウルフウツドは『人外の化け物』と出会った。

「ご主人、こいつか？新しい有望な人材とは？」

インテグラと化け物が何かを話しているが関係ない。それよりこいつはなんだ？自分の本能が殺せと命令する。しかし理性は化け物を観察しようとしていた。こいつは人間？否、こいつは化け物。けれど化け物としても異端。あの目は何かを望んでる。

生を？

否、

破壊を？

否、

ならばなにだ？

そして答えが出る。

ああ、そうかこいつは…

「お前は死を望んでる。」

ウルフウッドの咳きはその化け物に聞こえたようだった。化け物はウルフウッドの目を見ながら笑う。まさに狂った笑いで。

「ククク、ハハハハ！面白い！実に面白いぞ人間！ウルフウッドといったな。貴様は俺を殺すに値する人間だ！ああ、そうともこれだから人間は面白い！あの時のようにまた俺を殺すか？いいだろう。^{マイムスター}ご主人。こいつは面白い。用は済んだのだろうか？なら私は寝させてもらう。」

「ということだが信じて貰えたかな？奴こそが我々の鬼札^{ジョーカー}アーカー

トだ。」

「ああ、信じたる。インテグラ、お前に協力したる。よろしゅうな。」

「では、明日から正式に入れ、後のことはウォルター、お前に任せ
る。」

こうして、ウルフウッドは人外の狂った舞台に足を踏み入れた。

化け物との邂逅（後書き）

えー、この作品を読んでも人には大変迷惑な話ですが、更新がかなり遅くなります。

なんというか途中まではこんな感じで行こうと考えてるのですが、表現できないという作者の才能のなさが原因で中々出せません。

なので、書きやすい作品を出して力をつけつつ、この作品も書いていこうかと、すいません。しかし、絶対に終わらせません。なので皆さん見捨てないでください。

因みに、恋姫を書こうと思っています。
では皆さんまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4060t/>

ヘルシング×ライガン時々型月

2011年7月3日06時36分発行